

# 日本におけるディズニー・アニメーションの影響力 ～『シンデレラ姫』(1952) 日本初公開時における服飾流行と女性への影響～

江 良 智 美

1. はじめに
2. ディズニー・アニメーション版『シンデレラ姫』について
3. ディズニー版『シンデレラ姫』における服飾表現と 1940 年代後半アメリカ国内の服飾流行
4. 日本国内における物語としてのシンデレラの受容
5. ディズニー版『シンデレラ姫』日本初公開時の反響及び受容
6. 1950 年代前半日本国内の服飾流行とディズニー版『シンデレラ姫』の関係性
7. ディズニー版『シンデレラ姫』が日本の女性に与えた影響
8. 結語

## 1. はじめに

現在、ウォルト・ディズニー (Walt Disney, 1901-1966) の長編アニメーション作品に登場したプリンセスをモチーフとした雑貨類が、日本国内で多数販売されている。これらはアニメーションに馴染みの深い子どものみならず、ファッション感度の高い若い女性達にも広く支持されている。また、アメリカのディズニー・ストアでもアニメーションに登場した 12 人のヒロイン達が、ディズニー・プリンセスとして商品展開されている<sup>1)</sup>。

ディズニー・アニメーション作品に登場するキャラクターの服飾は、ストーリーの時代設定から逸脱せず、作品公開時に流行したスタイルや色彩を巧みに取り入れ構成されている。これは観客が期待する“実在感”をウォルトが大切にしていたことに起因する<sup>2)</sup>。

本稿はディズニー・アニメーション『シンデレラ姫』が製作された当時のアメリカ国内の服飾流行、原案となった物語としてのシンデレラの日本における受容、1952 年 3 月 7 日に日本で公開されたディズニー・アニメーション版

『シンデレラ姫』(Cinderella, 1950)<sup>3)</sup>の反響と受容を分析する。そして、日本国内の服飾の流行現象、女性たちの意識にどのような影響をもたらしたかを考える。

1940年代後半から1950年代にかけ、日本では外国映画からファッションスタイルを取り入れる『シネモード』が流行していた<sup>4)</sup>。また、少女向けの雑誌、マンガはファッション・プレートとして流行を生み出す機能を持っていた。ディズニー・アニメーションの『シンデレラ姫』は、公開から非常に長い期間繰り返し上演されたが、この作品の存在は日本の少女、若い女性達の流行現象にどのような影響を及ぼしたのかを検討する。

そして、ディズニー・アニメーション作品に登場するプリンセスが流行現象の中心的存在とされるようになった契機の商品として、『シンデレラ姫』の再評価を試みたい。

## 2. ディズニー・アニメーション版『シンデレラ姫』について

ウォルト・ディズニー・プロダクション (Walt Disney Production) が製作した長編アニメーション映画『シンデレラ姫』は、1950年2月15日にボストンで公開された。ウォルトは第二次世界大戦による中断も含め、構想から実現まで27年を費やした。6年の歳月をかけ、150万枚のセル画を用いて完成させたことは有名な逸話である。主人公シンデレラは一般的な少年少女が持つシンデレラのイメージを尊重し、青い眼、ブロンド、120ポンドの少女とし、その印象に合うモデルをオーディションで選抜した。そしてアニメーションにおける人物動作を撮影するためのライヴ・アクションを演じる女優として16歳の少女ヘレン・スタンレイ (Helene Stanley, 1929-1990) が抜擢された<sup>5)</sup>。監督はウォルトと黎明期から仕事を共にしたハミルトン・ラスク (Hamilton Luske, 1903-1968)、クライド・ジェロニミ (Clyde Geromini, 1901-1989)、ウィルフレッド・ジャクソン (Wilfred Jackson, 1906-1988) が担当した。アメリカ国内での成功の後、全世界で順次公開され、興業収入は約263.6億円を

記録し、ウォルト・ディズニー・スタジオ (Walt Disney Studio) の代表的な作品となった<sup>6)</sup>。

日本においては1952年3月7日、邦題を『シンデレラ姫』とし公開された。

ディズニー版『シンデレラ姫』の原作はシャルル・ペロー (Charles Perrault, 1628-1703) の童話 *Cendrillon ou La Petite Pantoufle de verre* (邦題『サンドリヨン, または小さなガラスの靴』) である。古くから広い地域に伝わる民間伝承をペローが17世紀の子女向けに改編したものに、さらにディズニー・アニメーション独自のストーリー展開、演出や小道具が加えられている。

### 3. ディズニー版『シンデレラ姫』における服飾表現と 1940年代後半アメリカ国内の服飾流行

ディズニー版『シンデレラ姫』は、ペロー原作の17世紀を舞台にしているわけではなく、基本的な家屋構造や移動手段、脇役の衣装などは近世から近代までの風俗を混在させたような雰囲気描かれている。しかし、シンデレラと王子の服飾<sup>7)</sup>は、明確に20世紀初頭をイメージさせる現代的なスタイルで描かれている。そこで、女主人公シンデレラの代表的な2点の衣装を分析したいと考える。

まず、日常着であるブラウス、膝下ミモレ丈のスカート、腰下エプロンは、17世紀の下女としては袖の膨らみが少なく、短いスカート丈である。これは1940年から5年間に制定された、戦時下において布をなるべく使わないために施行された衣服統制令<sup>8)</sup>を連想させる。戦時下という重苦しいムードの中、着丈、用尺、デザイン等細かな規制がされ、資材の使用は必要最低限とされた。しかし、困難な時代においてアメリカでは独自のファッションスタイルが自国のデザイナーによって確立された。中でもクレア・マッカーデル (Claire McCardel, 1905-1958)<sup>9)</sup>は、中流階級向けの機能的な既製服を提案した。実用性を重視したスタイルに貞淑な女性の優しさを感じさせるスタイルであるが、

シンデレラの日常着にもこうした戦時中の制限された状態の中で自ら装うことを諦めない意思を感じさせる。シンデレラの日常着は不遇の身という状況を悲壮に表現はしていない。茶系の暗色が用いられたスカートからは戦中のミリタリー調の色彩を連想させる。しかし、袖に明清色の薄水色が追加されることで清潔感とシンデレラの穏やかな性格を感じさせる。日常着に合わせたヘアスタイルもまた、1940年代後半のアメリカで流行した、前髪を大きなカールで巻くビクトリーロールを彷彿とさせる。そして、作品冒頭の朝のシーンでは質素な装いだが髪をとかし、身だしなみをきちんと整えるシンデレラが描かれている。ビクトリーロールは1940年代のハリウッドで活躍した女優らの間でも広く好まれ、シンデレラは彼女たちに遜色ない女性という印象を与えている。

一方義理姉達、アナスタシアとドリゼラは、バストを強調したパフスリーブの、典型的な17世紀風のドレスを着ている。蛍光がかったマスタード色とショッキングピンク色のスカートに同系色で暗色のボディス、不調和なヘアアクセサリーが道化の印象を強くしている。義理姉達のドレスは一見シンデレラより豪華であるが、当時の流行現象を考えるとシンデレラのほうが現代的なスタイルとして描かれている。

次に、フェアリーゴッドマザーの魔法によって変身した後のドレスを検証する。パステルブルーで統一されたドレスは大きく開いたデコルテ、小さなキャップスリーブのついた袖、同系色のオーバースカートと肘上丈の長手袋である。アクセサリーは黒のリボンとドレスと同色のイヤリング、ヘアスタイルはドレスと同色のヘアバンドにビクトリーロールを応用したアップスタイルである。このドレススタイルは第二次世界対戦終了後、1947年にクリスチャン・ディオール（Cristian Dior, 1905-1957）が発表した『コロールライン（Corolle line）』を連想させる<sup>10)</sup>。コロールラインはニュー・ルックとも呼ばれ、ヨーロッパでは驚嘆とともに一世を風靡した。肩は丸みを帯び、ウエストは細くなだらかに絞り、スカートは多くの分量の生地を使用した全円状のギャラーフレアのロング丈で、下着にパニエを入れ踝丈まで膨らませる。この女性らしさを強調したスタイルは戦後の緊張感と物資不足がまだ残るボールド・ルック

(Bold look) からの大きな転換点であった。シンデレラのドレスはウェストを強調したコロールラインのシルエットの影響を感じさせる。また、シンデレラのドレスの描写は布の量感を重視し、リボンやフリルなどで装飾過多にしている点においても現代的でコロールラインの作品に類似する点である。しかし、アメリカではコロールラインに対して当初は賛否両論があったとされている。アメリカ服飾社会史研究会会長の元武庫川女子大学教授である濱田雅子氏は著書『アメリカ服飾社会史』<sup>11)</sup>で次のように論考している。

アメリカはニュー・ルックをそのまま自国のファッションに持ち込んだわけではなく、アメリカ型の実用性を組み込んで、アメリカン・スタイルに仕上げていた。こうしてニュー・ルックは、アメリカの大衆消費社会、郊外型のライフ・スタイルに浸透していく。

シンデレラのドレスの描写もまた、ヨーロッパ調のローブ・デコルテではなく、アメリカ型の実用性を取り入れ、1950年以降に続くアメリカン・スタイルを予感させる点はウォルトの先進性と言えるだろう。

ドレスに採用された色彩であるパステルブルーは1940年代後半から若い女性に流行していた色で、またサムシング・ブルーとして女性の幸福や結婚を象徴する色でもある。ヘアスタイルも単なるビクトリーロールの応用ではなく、1950年代に大流行するロカビリースタイルを彷彿とさせるリーゼント状の前髪が進歩的で斬新な印象を与える。

1945年の終戦後、パリで活躍していたデザイナーはハリウッドの映画産業にも進出し、衣装デザインに積極的に参加していた。ディオールも1948年のアルフレッド・ヒッチコック (Sir Alfred Joseph Hitchcock, 1899-1980) の『舞台恐怖症』(*Stage Flight*, 1950) で、マレーネ・ディートリヒ (Marlene Dietrich, 1901-1992) の衣装デザインをしている。尚、ディオールは1954年『終着駅』(*Stazione Termine*, 1955) では第27回アカデミー賞衣装デザイン賞モノクロ作品部門にノミネートもされている。1940年代後半から1950年代

の映画の衣装は最先端のファッションスタイルの情報発信源でもあった。それらも踏まえると、ディズニー版『シンデレラ姫』もアニメーション作品ではあるが、流行現象を取り入れたファッションスタイルを描いていることが理解でき、そうした実写映画と遜色ない細部の演出という試みが本作の成功につながっていると考えられる。

#### 4. 日本国内における物語としての『シンデレラ』の受容

日本国内でシンデレラに類似した民間伝承には『鉢かぶり』が存在する。国立国会図書館に所蔵されている資料でシンデレラが最も古く西欧の伝承として紹介されている資料は、1887年に出版された菅了法（桐南居士、1857-1936）訳『西洋古事神仙叢話』であり<sup>12)</sup>、「シンデレラの奇縁」として次のように描写されている。

鳩やこひこひ この木を振るへ  
 花の小袖に 玉の靴  
 振るひ落せよ 我の前に  
 雨の降るほど 我の前へに

菅了法が翻訳した「シンデレラの奇縁」にはフェアリー・ゴッドマザーは登場せず、鳩が木の枝でシンデレラのために衣装を出しているため、原書は恐らくグリム兄弟版と考えられる。

1919年厨川白村の『小泉先生そのほか』では「お伽噺の話」の第4節としてシンデレラを紹介している<sup>13)</sup>。厨川は世界各地に伝わる口述伝承の民話としてのシンデレラに関する論述を試みている。その後、1926年に大阪毎日新聞社より出版された『芝居とキネマ』<sup>14)</sup>10月号、国際情報社より出版された『劇と映画』<sup>15)</sup>1927年に出版された小学新報社の『少女号』<sup>16)</sup>には、パラマウント映画『ベティ・ブロンソンのシンデレラ物語』(*A Kiss For Cinderella*, 1925)

に関する記事がある。『ペティ・ブロンソンのシンデレラ物語』は、シンデレラと呼ばれている少女が主人公の作品である。この頃から「シンデレラ」をモチーフとした物語が徐々に日本国内で登場するようになる。

1928年には菊池寛が児童劇集としてシンデレラを紹介し<sup>17)</sup>、学習用教材として改編された作品が多く出版され、学芸会などで上演する演目としてシンデレラは人気を持つようになった。翌年1929年には『宝塚歌劇：シンデレラの唄』として宝塚少女歌劇花組スター連が劇音楽としてレコードを発表している<sup>18)</sup>。1930年頃からシンデレラというモチーフは少女雑誌に定期的に登場するテーマの1つとなり、新しい創作童話や短編小説が次々に発表された。その一例を見てみると、1938年の深水政策が発表した『小さい花束』<sup>19)</sup>では、人形芝居用のシンデレラの小さな靴を作るヨーロッパの靴屋の少年の話などが挙げられる。シンデレラをモチーフとして書かれた創作童話は、西洋の雰囲気伝えるものであった。

第二次世界大戦中の1943年には、版画家川上澄生によって『しんでれら出世繪巻』として日本に舞台を置き換えられ出版された<sup>20)</sup>。シンデレラの日常着は和服に日本髪、フェアリーゴッドマザーは教母と表現され、質素な和服姿で描かれており、舞踏会の場面は洋装の男女が鹿鳴館風ドレスで踊る姿が描かれている。

終戦後の1946年以降はGHQ占領下において世界の児童文学を教育指導に加えるという方針もあり、シンデレラの物語は美しい挿絵とともに児童雑誌に多く掲載され、また少年文庫シリーズから東郷青児の挿絵の入った美装版の書籍も出版された<sup>21)</sup>。

少女雑誌では戦前と変わらずシンデレラをモチーフとした創作短編小説も多く掲載されていた。しかし、主人公は日本人の少女に置き換えられ、逆境に立ち向かう姿やお姫様に憧憬を抱く内容となっている。堀寿子『乙女の願い』に掲載された「シンデレラの劇」<sup>22)</sup>では、学芸会でシンデレラを上演するために奮闘する女学生達の話、神崎清『ダリアの少女』に掲載された「台所のシンデレラ」<sup>23)</sup>では、みんなに内緒で居候宅の家事や子守をする少女が描かれた。こ

れは戦後の混沌とした時代の少女達がシンデレラの過酷な状況と自らを重ね合わせ、未来への希望や願望を具現化したような作品を求めていたと考えられる。1946年からディズニー版『シンデレラ姫』が公開された1952年3月までに出版された書籍及び雑誌記事、シンデレラをモチーフとして創作された短編等を合わせると、国立国会図書館の蔵書に記録されているものだけで113冊ほどの作品が出版されている<sup>24)</sup>。この他赤本漫画、貸本漫画、記録のない少女雑誌や婦人雑誌等も含めると、非常に多くの書籍にシンデレラ、シンデレラをモチーフとした作品が掲載されていたと考えられる。

ディズニー版『シンデレラ姫』が公開される1952年までに、シンデレラという物語は日本国内ではグリム版、ペロー版共に老若男女問わず広い世代に童話として認知され、逆境に立ち向かう主人公として親しまれていた。その人気の例として、1952年2月1日、東京駅の待合室にシンデレラの像が設置され、作者である彫刻家黒田喜治氏と東京駅長の談笑する風景の新聞記事が残されている<sup>25)</sup>。また、1951年には東京銀座の歌舞伎座において貝谷八百子バレエ団が『シンデレラ姫』を上演している<sup>26)</sup>。日本におけるバレエ公演は戦前から人気があったが、貝谷八百子バレエ団は終戦後すぐに活動を再開し、1946年に『白鳥の湖』全幕を東京銀座の帝国劇場にて17日間の公演を行った<sup>27)</sup>。そして1948年に公開されたイギリスのバレエ映画『赤い靴』(*The Red Shoes*, 1948)の爆発的なヒットから少女向けの漫画や雑誌でバレエブームが始まっていった。貝谷八百子バレエ団の1951年公演『シンデレラ』では、プロコフィエフ版の全幕上演は日本初の試みであったが、1年の構想の年月をかけられたこともあり、非常に美しい出来栄えで多くの観客動員があったとされている<sup>28)</sup>。物語としてのシンデレラは戦後の困難の中、日本国内で親しみを持って受け入れられていたのだ。



## 5. 日本国内におけるディズニー版『シンデレラ姫』公開時の 反響及び受容

1952年のディズニー版『シンデレラ姫』が公開されると、児童雑誌等に掲載されるシンデレラのあらすじはペローやグリム兄弟の描いた結末ではなく、村岡花子が文章を手がけ『ウォルト・ディズニーのシンデレラ姫』としてディズニーが許諾した挿絵を用いた絵本に準拠するようになった<sup>29)</sup>。更にシンデレラの物語は学生向けの英語学習教材などに積極的に採用されるようになった。国立国会図書館には1959年11月25日納本の書籍として中高生向けの英語学習参考書としてシンデレラを扱ったものがある<sup>30)</sup>。訳注にはページごとに重要な熟語の解説、英語学習のドリルが付いている。原作はグリム兄弟とあるが、挿絵のシンデレラや王子の服飾、ヘアスタイルはディズニー版『シンデレラ姫』に近い描写となっている。

次に、1952年公開時のディズニー版『シンデレラ姫』のチラシや映画パンフレットはどのような構成か、また出稿している広告から当時の観客などを検討する。本稿で入手できた映画パンフレットは1953年3月11日に発行された国際出版社版、出稿広告や紙面の内容から<sup>31)</sup>1953年春頃発行と推定される松竹事業部編集の東京劇場版<sup>32)</sup>、同年出版とされる新世界出版社<sup>33)</sup>の3点である。チラシは1953年頃に発行されたと推測される阿佐ヶ谷オデオン座の1点である。日本公開初日は1952年3月であったが、映画興行収入成績、現存するパンフレット等を検討すると、実際観客動員を得たのは1953年以降であったと考えられる。以下にパンフレットの内容、出稿広告を表とした。

表1の松竹事業部版のパンフレットは銀座周辺の店舗から広告が多数出稿されている。4ページの日本橋室町1丁目の『トミーシューズ』の広告には次のような文言が掲載されている。

シンデレラ姫ロードショウ期間中御買上の方へ入場券進呈

御入場者に毎日1名 シンデレラ靴、9名に賞品進呈

東京劇場は銀座の映画館であったため、銀座周辺の店舗の情報が多く掲載されている。また、月刊『スタア』創刊者の南部圭之助氏の評論が掲載されてお

表1 1953年発行『東劇 No. 60 色彩絵物語シンデレラ姫』映画パンフレット

頁	内容	広告
表紙	シンデレラ3場面カラー	
1	英語版の解説、あらすじ、イラスト	
2	日本語版解説	養毛料『ヨウモトニック』
3	物語解説（イラスト入り）	『個性を生かす店、生地』 モデスト婦人服部
4	物語解説（イラスト入り）	『幸福はピッタリ合うお靴から 愛靴の店トミーシューズ』
6	評論『シンデレラとコメディ・チーム』（南部圭之助）	高級紳士服・舶来生地 『英國屋』
7	評論『シンデレラとコメディ・チーム』（南部圭之助）	口臭予防薬『サクロフィール』 日本衛材株式会社 『軽量品章貨裁』 株式会社大勝堂
8	『偉大なる芸術家ウォルト・ディズニー』 『トピック・この映画ができるまで』	『苺あんみつ』 銀座四丁目亀八
9	原作について シンデレラ声の出演 アイリン・ウッズ	*『シンデレラ姫アルバム』 歌舞伎座前文化堂 *『婦人服飾ハンドバッグ、ネクタイ、ブラウス』 銀座5丁目カシワ
10	近日公開『百万ドルの金魚』 東劇エチケット	4月号『スタア』 シナリオ雨に唄えば…
11	映画『ガンガ・ディン』解説	
裏表紙	一面広告	落ちない口紅『キスミーブルーフ』 キスミー化粧品

り、ディズニー版『シンデレラ姫』の注目度の高さが推測できる。パンフレットに掲載された広告は薬粧品 3, 服飾品 5, 書籍等 2, 飲食店 1 である。

表 2 の国際出版社版は、表 1 の松竹事業部版よりも地域性の低い広告で構成

表 2 1953 年 3 月 11 日国際出版社発行『ウォルト・ディズニーのシンデレラ姫』  
映画パンフレット<sup>34)</sup>

頁	内容	広告
表紙	シンデレラ, 小鳥, ネズミ (カラー)	
1	英語版のあらすじ, 解説, イラスト	
2	日本版作品解説	絵本『シンデレラ姫』国際出版社
3	物語解説 (イラスト入り)	薬用クリーム『アネス』太陽製薬
4	物語解説 (イラスト入り)	虫くだし『アスキス』 ナガ製薬株式会社
5	物語解説 (イラスト入り)	養毛料『ヨウモトニック』
6	この映画の出来るまで	『グンゼのカッターシャツ, 絹靴下, メリヤス肌着類』 郡是製糸株式会社
7	『シンデレラ』の声の出演／アイリン・ウッズ 偉大なる芸術家／ウォルト・ディズニー	二子玉川『春の多摩川堤』 東京急行
8	シンデレラ姫の原作者 シャルル・ペロオ	和英対訳シナリオ・シリーズ; No. 35, メトロ・ゴールドウイン・メイヤー 超 特 作『Father of the Bride: 花嫁の父』国際出版社
9	この映画で唄われる歌曲	『ピクニックは多摩湖・狭山湖・ユネスコ村』西武電車 『ハイキングは奥武蔵』西武電車
10	この映画で唄われる歌曲	『ウォルト・ディズニーのシンデレラ姫』新潮社版
裏表紙	表紙に使った小鳥をレイアウトした 広告	お嬢様は今から! 栄養クリーム 『ジュジュ・クリーム』 ジュジュクリーム社

されている<sup>35)</sup>。国際出版社版の内容の特徴としては、3 から 5 ページの物語解説、9, 10 ページの『この物語で唄われる歌曲』の日本語が、掲載された英文と対訳となっている点である。国際出版社は 1940 年代後半から 1950 年代にかけ、ディズニー・アニメーションに関する書籍、映画パンフレット、映画シナリオの和英対訳シリーズの書籍を多数手がけていた<sup>36)</sup>。国際出版社のパンフレットの内容は若年層の英語学習者を視野に入れた構成となっている。10 ページの『この映画で唄われる歌曲』に掲載された歌曲『これが恋というもの』に関しては、次のような解説が加えられている<sup>37)</sup>。

「赤い靴」のバレエの場面でもみているような、素晴らしい宮殿  
王子様と、シンデレラが踊り続け、その口から、いつしか楽しい歌がも  
れてきます。

このことから、ディズニー版『シンデレラ姫』の観客層は、『赤い靴』などの観客層と近く、ミュージカル映画を理解する世代を想定していたことが理解できる。尚、パンフレットに掲載された広告は、書籍 3、薬粧品 3、電車旅行 2、服飾 1 である。

表 3 に関しては、表 1 と表 2 の映画パンフレットを参考に、やや簡易版として製作されたように感じられる<sup>38)</sup>。1950 年代当時は著作権等の権利関係が曖昧であったため、複数の映画パンフレットが製作され販売されていたと推測できる。広告出稿に関しては服飾 1、書籍音楽 2、飲食 2 である。

表3 発行年不明（1953年頃発行）新世界出版発行『色彩長編絵物語シンデレラ姫』  
映画パンフレット

頁	内容	広告
表紙	カラーイラスト	
1	英語あらすじ	
2	解説、イラスト入り登場人物紹介	『愛靴の店』 トミーシューズ
3	イラスト入りあらすじ	レコード『ジャンバラヤ』 コロムビアレコード
4	「シンデレラ」の声の出演アイリン・ウッズ	ディズニーの最新傑作絵本『シンデレラ姫』 新潮社版
5	主演者について この映画のできるまで	
6	偉大なる芸術家 ウォルト・ディズニー	『リボンシトロン』
裏表紙	一面広告	『明治バターキャラメル』 明治製菓株式会社

図1の阿佐ヶ谷オデオン座のチラシに関しては同時上映がエリザベス・テーラー（Dame Elizabeth Rosemond Taylor, 1932-2011）主演の『可愛い配当』（*Fathers Little Dividend*, 1951）、記録映画『英國女王戴冠』（*A Queen's Crowned*, 1953）であったことから、ディズニー版『シンデレラ姫』が子ども向け作品ではなく、成人向け作品と捉えらえたと考えることができる。広告に関しては世田谷区阿佐ヶ谷の映画館周辺の店舗から出稿されているが、成人向けの広告が多く見られる。

1953年に出版された日本視聴覚協会が出版した『視聴覚教育』第7号<sup>39)</sup>に掲載された「今月の映画教室から」では次のように講評されている。

美しい音楽に奏でられながら、動く絵本を見るという感じのこの作品は漫画映画を一般映画より低くみがちな高校、青年、成人に積極的に見せ、ディズニーのウィットと芸術性を味わせたい。

図1 1953年頃発行『阿佐ヶ谷オデオン座チラシ』



総括すると、現存する資料からの分析では、ディズニー版『シンデレラ姫』に出稿された広告には子どもや家族向けより成人向けの広告や呼び掛けが中心で多く見られる。ここから日本国内ではアニメーション作品ではあるが青年層向けのミュージカル映画作品として認知があったと推測される。尚、公開当初の1952年に雄鶏社から発行された『映画ストーリー』第02号<sup>40)</sup>では「ディズニーが再現してくれた、世界中のお嫁さん方の夢、シンデレラ姫の楽しい物語」という見出しとともにあらすじが掲載されている。また、1952年公開当時のチラシ<sup>41)</sup>の見出しには「乙女の夢を限りなく 大ディズニーの芸術大作!」とうたわれている。いずれも若い女性に向けた洒脱な印象を与える文言である。

ディズニー版『シンデレラ姫』はその後、数度日本においてロードショー公開されているが、『ダンボ』(*Dumbo*, 1940)、『101匹わんちゃん』(*One Hundred and one Dalmatian*, 1961)など、より家族向けの作品と同時に上映されることで子どもたちに浸透していったと考えられる。その推移をチラシの見出しから検討してみると、1974年『ダンボ』と同時公開された際には「きらめく歌声、楽しい物語、永遠のミュージカルファンタジー」と掲載されている。1982年に文部省特選映画とされ『101匹わんちゃん』と同時公開された際には「愛の物語、ふたつ」という見出しが付いている。1987年に『不思議の国のア

リス』(*Alice in Wonderland*, 1951) と同時公開された際のチラシには「ひみつと魔法の不思議の国へ：夏休みロードショー公開」とコピーライトされている。1992年には日本のアニメーション映画『キャンディ・キャンディ』(1992), 『きんぎょ注意報』(1992) と同時公開され, 「夢のファンタジー・ワールド」として「素敵な夢, 楽しい友情, 楽しい夢がいっぱいのファンタジー」という見出しが加えられている<sup>42)</sup>。

つまり, ディズニー版『シンデレラ姫』は日本初公開時は青年層を主たる観客としていたが, 精巧な日本語吹き替え版の登場, またディズニー・アニメーションの他作品に子ども向けの内容が充実し, ディズニー・アニメーションは低年齢層向けの娯楽作品であるという認知が広まると『シンデレラ姫』もその1つと考えられるようになったと推測することができる。

## 6. 1950年代前半日本国内の服飾流行とディズニー版『シンデレラ姫』

ディズニー版『シンデレラ姫』が公開された1952年は, 日米講和条約・日米安保条約・日米行政協定が発行され, 極東委員会, 対日理事会, GHQが廃止された年である。日本国内のファッション産業では日本ファッション・エディターズクラブが発足, 日本織物出版社から『流行通信』が創刊された。日本織物出版社は1947年『アメリカンスタイル全集』を刊行し12万部を売り上げ, 翌年は『アメリカンスタイル全集(盛夏号)』を出版し, 15万部を売り上げるなど, アメリカ映画を中心としたファッションスタイルを紹介する書籍を相次いで発表していた。GHQの廃止により, 個人的に海外の渡航が可能になったため, 『流行通信』などではファッション関係者が特派員として高まりつつあったパリ・オートクチュールの情報, さらにパリ国内のファッション情報を積極的に紹介し始めていた<sup>43)</sup>。パリ国内のファッション情報の傾向としてはディオールのコロール・ラインに影響を受けたシース・ルック<sup>44)</sup>やフル・スカート<sup>45)</sup>の一般的な流行などが伝えられた。いづれも西洋服飾に関する知識の乏しい当時の日本人にとってはドレスのような印象のあったものである。

また、日本国内ではナイロン、ベンベルグなどの化学繊維を用いた商品が登場し、ナイロンストッキングの普及も広がり始めていた。当時の若い女性の洒落な装いとしては、ナイロンやエバークレース<sup>46)</sup>のブラウス、生地分量を多く使用したフレアタイプのフル・スカートであった。化学繊維の増産により下着ブームが起きたため、スカートを膨らませることは最先端の流行であったが、夏には生地不足からノースリーブも流行し始めていた。

こうした1952年の日本国内の流行の装いは、偶然にもディズニー版『シンデレラ姫』の装いと合致していた。家事労働に追われるシンデレラの日常着は平均的な日本人女性の普段着、そして変身後のドレススタイルは最新の流行スタイルのノースリーブ、シースルックのタイトなトップス、豊かなボリュームのフル・スカートの組み合わせであり、またカラーは流行のパステル・ブルーであった。アメリカ本国より2年遅れで公開され、さらに一般的な観客に届くよう広く公開されるまでに1年かかったことが、アメリカのファッションを数年遅れで追いかけていた日本国内の服飾の流行現象と合致したと考えられる。また、GHQの占領終了によるアメリカン・ファッションの流行、外国映画を参考にした『シネモード』の情報拡散、そして日本国内の繊維産業の状況が奇遇にも時期を同じくし、『シンデレラ姫』は日本公開時、最新の流行ファッションを取り入れた作品となったのであった。

また、1950年代の日本国内ではファッション産業の高まりにより、新しい装いの告知するためにファッションモデルが必要となった。そのため、各種の美人コンテストなども話題となった。「選ばれる特別な存在」として幸せになるというディズニー版『シンデレラ姫』の結末から、「見出された少女」を表現する言葉として「シンデレラ」は多様されるようにもなった。「シンデレラ」という表現を用いた雑誌記事はディズニー版『シンデレラ姫』公開以前から存在するが、1950年代には東宝主催によるコンテスト『東宝シンデレラ娘』が行われるなどその表現は美しい女性が見出されることを意味するようになっていった。また、『週刊サンケイ』1952年11号には、「ニュースストーリー・当代のシンデレラ娘／根岸明美」として、女優の根岸明美氏が紹介されてい



る。

ディズニー版『シンデレラ姫』の主人公が美しい少女として描かれている点について、ペロー版を基としたディズニー版『シンデレラ姫』と、グリム版シンデレラの相違点及び比較に関して2010年に発表された論文で武庫川女子大学教授の野口芳子氏は次のように指摘している<sup>47)</sup>。

- 1) ディズニー版<sup>48)</sup>では美しい舞踏会用ドレスを与えたのがフェアリー・ゴッドマザーであるのに対し、グリム版ではハシバミの枝（もしくは若枝）を母の墓前に植え、そこから欲しいものを得る点
- 2) シンデレラが舞踏会で落とす靴がディズニー版はガラスに対し、グリム版では金の靴（貴族の象徴であるミュール）である点
- 3) ペロー版では義理姉の美醜は明記されていなかったがディズニー版では義理姉、継母ともに醜人、シンデレラを美人にしている。一方、グリム版では美を豊かさの象徴に置き換え、髪の豊かさや衣装の豪華さで表現している点。また、王子に関する描写もディズニー版では外見の美しさを表現している点
- 4) ディズニー版では夜12時の鐘とともに魔法が解け、王宮の人々に気づかれずシンデレラは帰路に着くが、グリム版では昼間行われた舞踏会に参加したシンデレラは自らの健脚で王子を置いて走り去る点
- 5) ディズニー版ではシンデレラの父親はすでに死亡し登場しないが、グリム版ではシンデレラの父は継母の尻に敷かれ、発言力のない頼りない人物として描かれている点
- 6) 16世紀末のフランス宮廷社会の規範を体現するペロー版には「恩赦、慈悲」としてシンデレラは義理姉たちを許す場面が加えられてるが、ディズニー版ではシンデレラの美しい結婚式が中心に描かれる。一方グリム版では神的存在である鳩によって「眼球除去の罰」が義理姉達に与えられる点

これらの相違点に対し、野口氏は次のように分析している。

ディズニーのシンデレラが「従順で受動的な女性」であるのは、性別役割分業が叫ばれた近代女性の理想像が描かれているからだ。

確かに、ディズニー版『シンデレラ姫』には従順な女性像が暗喩として描かれていると捉えることもできるが、ディズニー版『シンデレラ姫』は、ペロー版を20世紀当時のアメリカ社会に女性の視点から見ても不快感の無いよう、慎重に改編されたと考えるのが妥当であろう。ディズニー版『シンデレラ姫』のコンセプト・アートを任されたメアリー・ブレア (Mary Blair, 1911-1978) は様々なシークエンス、キャラクターなどにおいて幻想的な優美さを提案したが、ウォルトはそれらが表現する意図のみを採用し、実際の作画や色彩設定には用いず、親しみやすい感覚が得られるものを重要視した。

第二次世界大戦後中は、勝利国であったアメリカにおいても、女性はファッションや振る舞いを制限されることは多かった。1947年のパリ・オートクチュール組合の取り組みは世界中に広まり、女性を女性として開放することは女性らしく振舞い、装うという発想は夢を持って多くの女性に受け入れられた。その結果、ディズニー版『シンデレラ姫』のシンデレラは決して突飛な行動は起こさず、継母らに苛められても耐え忍ぶ。全体的な行動は控えめであるが、熟考し行動するという人物像は家庭の復興を求めているアメリカの観客に受け入れられたと考えられる。この点に関して亜細亜大学短期大学部の尾上典子教授は論文『Walt Disney とアメリカ大衆文化：芸術と企業の理想的融合』<sup>49)</sup>において次のように解説している。

Perraut も Grimm 兄弟も迫害される娘の父親は生きているのに、実の娘の継母の暴挙を黙認するという陰惨な設定のもと物語が展開しているのに対し、Walt Disney 製作の Cinderella では母を失った娘に新しい保護者を探してやろうとする父親の善意が裏目に出てしまい、父の亡き後で邪悪な継母と連れ子たちが先妻の美しい娘を召使代わりに酷使するようになった。

また、結末については次のように論じている。

勤労と努力を美德とするプロテスタント精神が Walt Disney の Cinderella では強く打ち出されており、女主人公の幸福な結婚は、彼女の絶えざる努力に対する神の祝福と解釈される。このような意味で Walt Disney がヨーロッパの物語の中の Cinderella に新たな生命を吹き込んだと理解することができるのだ。

尾上氏の論は公開当時のアメリカの状況を踏まえると、的確な意見として捉えることができる。ディズニー版『シンデレラ姫』は単なる性別役割の理想像として描かれたのではない。性格描写は当時の風潮を基に戦後の復興期に希望を与えるよう十分に良心的に推敲され、視覚的表現の中には当時流行していたファッションスタイルを小道具として使用する努力も怠らなかった。こうしたことは、ディズニー版『シンデレラ姫』に単なるファンタジーではなく、同時代性を持ち、実写映画に劣らないウォルトが求めていた「実在感」を作品に与えた。結果、ディズニー版『シンデレラ姫』は童話に馴染みのあった子どもだけでなく、多くの女性の共感を獲得し、ウォルトの戦後最大の代表作と呼ばれるようになったと考えられる。

このウォルトの努力は、日本公開時にも強く影響した。戦前から日本国内ではペロー版、グリム版共にシンデレラは西洋の物語として広く親しまれていた。大正から昭和初期に開花した文化モダニズムは戦時中中断を余儀なくされたが、西洋文化とシンデレラの幸福な結末は重ね合わされ、女性達の憧れの対象として持ち続けられた。敗戦後、家長の男性が多く戦死し、自らが家庭の経済基盤とならざるをえなかった母親の世代を間近で見た若い女性たちは、ファッションスタイルなどを中心に西洋へ強い憧憬を見出した。また平和な世の中で女性として選ばれ、望まれる幸せな婚姻へという女性としての幸せへの憧れも抱くようになった。慣れ親しんだシンデレラという童話に、最新の服飾流行と素晴らしい結末が加えられていたディズニー版『シンデレラ姫』は、

1950年代の日本の女性が憧れるものが凝縮されていた。

## 7. ディズニー版『シンデレラ姫』が日本の女性に与えた影響

日本人は上演芸術や映画などの視覚芸術に対し、自己の憧憬の具体化を求める傾向にある。西欧の観劇が舞台に対し客観的視点を求めるのに対し、日本の舞台構造は物語に対する主観的視点を要求する。映画においても作品の物語に普遍性を見出すのではなく、主観的視点により自己投影を強く持つ場合がある。ディズニー版『シンデレラ姫』公開当時は1953年のテレビの本格放送が開始される以前だったため、映像による視覚情報はより具体的な体感を持って観客に訴えかけた。そしてその情報は母から娘へ伝えられ、ディズニー版『シンデレラ姫』は女性の幸せの象徴的存在となっていくと考えられる。

神戸山手短期大学の土井茂桂子教授による『若年結婚層への結婚意識喚起を図る調査と提案：プリンセス像から掴む若者の華燭の宴像』<sup>50)</sup>では、「プリンセス」というキーワードから18歳から23歳の女性の結婚する際に行う結婚披露宴に対するイメージの調査を知ることができる。土井氏によると、若年結婚層の結婚式や披露宴で洋装のドレスを希望するものが全体の62.8%であり、彼女たちの多くは結婚式の最大のポイントは「ドレス」だという。「ドレス」を着た人物が人生最大の祝宴である披露宴で主人公たり得るという考えを持つ女性は非常に多いと述べている。

土井氏の調査の中で「物語のプリンセス（架空のプリンセス）で実際に思いつくプリンセスの名前をあげてください」という設問に対し複数回答を求めた結果、有効アンケート数275票のうち、「シンデレラ」は238票を獲得した。調査時に若年結婚層とされた1987年～1991年生まれの世代は1983年に開業された「東京ディズニーランド」により、ディズニー・アニメーションのキャラクターはより親しいものとして認識されている。彼女たちの祖母は1952年の日本初公開時に少女時代を過ごし、親世代は再公開された映画を少女時代に観ている世代でもある。

土井氏はさらにディズニー版『シンデレラ姫』の色彩構成を分析している。ディズニー版『シンデレラ姫』に登場する善人であるキャラクター達は、明るく濁りのない、これはPCCSのカラートーンにおける「パールトーン（明清色）」に属していると分析している。また、日本カラーデザイン研究所の基本感性分類の13分類の中から「プリティ」「ロマンティック」などの色区分がディズニー版『シンデレラ姫』の善人を構成する色のカテゴリーに属していると分析している。

他の設問で「プリンセスを形容する言葉を挙げてください」という問いに対しては、「かわいい」、「美しい」、「きれい」、「キラキラ」、という外見的な形容詞の次に「優しい」という言葉が17票獲得していた。これらはペロー版を基としたディズニー版『シンデレラ姫』を連想させるものであり、日本の女性にとって女性観や結婚観に強い印象を与えているものと考えられる。

ディズニー版『シンデレラ姫』は本国アメリカでは男性に高い理想を求め続ける女性の潜在的な依存願望を表すものとして「シンデレラコンプレックス」として1981年に女性作家コレット・ダウリング（Colette Dowling, 1938-）<sup>51)</sup>が提唱したが、日本国内ではシンデレラの存在はジェンダー<sup>52)</sup>を論じる際を除き、あまり一般的には否定的に捉える風潮はない。

また、ディズニー版『シンデレラ姫』が理想の結婚式の花嫁や女性像として捉えられているという点は、本国とは異なる日本独自のグローバル化した文化となりつつあると考えることもできるだろう。また、ディズニー版『シンデレラ姫』が憧れを感じる存在として現在も日本の若い女性に影響を与えているという事実は、物語だけでなく、公開時に最先端のファッション性を持っていたことが影響していると考えられるだろう。

## 8. 結 語

こうしたことから、『シンデレラ姫』を筆頭に、ディズニー・アニメーションに描かれたプリンセスは、公開された時代を反映した女性として日本では受

容されていると考えることができる。特に日本ではキャラクターの個性を単なる虚構としてだけではなく、模倣して楽しんだり1つの価値観として、あたかもそのキャラクターが生を受けているものと同じように受け止めるという文化現象を国民性として持っている。ディズニー・アニメーションの『シンデレラ姫』は、単なる童話の主人公ではない。時代の流行を敏感に察知し、最先端の女性として映像に表現されているからこそ、現代の若い女性にも受け入れられているのだ。ディズニー・アニメーションのプリンセスたちは、アニメーションではあるが、その性格描写から服飾表現に至るまで、全てに同時代性を持ち、ファッション・リーダーとしての役割を担うこともできる精巧さを持っている。それが大人から子どもまで長い年月親しまれる理由であると考えることができるだろう。

## 【参考文献】

- 1) Disney Store, <https://www.disneystore.com/d-characters/mn/1000001/> 平成 28 年 9 月 16 日閲覧。
- 2) ジョン・ケインメーカー, 那波かおり訳『メアリー・ブレア; ある芸術家の燦めきと, その作品』2010, 岩波書店, pp 46.
- 3) 本稿では公開時の邦題に合わせ、『シンデレラ姫』として表記し, 適宜ディズニー版『シンデレラ姫』とする。
- 4) 渡辺明日香『ストリートファッション論: 日本のファッションの可能性を考える』産業能率大学出版部, pp 80-87.
- 5) 映画パンフレット『ウォルト・ディズニーのシンデレラ姫』国際出版社, 1953, pp 6.
- 6) Box Office Information for *Cinderella*. The Numbers.  
[http://www.the-numbers.com/movie/Cinderella-\(1950\)#tab=summary](http://www.the-numbers.com/movie/Cinderella-(1950)#tab=summary), 2016 年 9 月 6 日閲覧。
- 7) 王子の衣装は 19 世紀から 20 世紀初頭の軍装をモチーフとしている。
- 8) 文化服装学院編『文化ファッション大系服飾関連専門講座 11 改訂版・西洋服装史』文化出版局, 2012, pp 76.
- 9) 大沼淳, 荻村昭典, 深井晃子『ファッション辞典』文化出版局, pp 654.
- 10) コロール・ラインとは, フランス語で<花冠>の意味で, スカートが花のように広がったラインのこと。1947 年にクリスチャン・ディオールが発表した。前掲, pp 192.
- 11) 濱田雅子『アメリカ服飾社会史』, 東京堂出版, 2009.
- 12) 菅了法『西洋古事神仙叢話』, 1887, 集成社, pp-132, 「シンデレラの奇縁」。

- 国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/759887> 平成 28 年 9 月 8 日閲覧。
- 13) 厨川白村著『小泉先生そのほか』積良館, 1919.  
国立国会図書館デジタルコレクション, 平成 28 年 9 月 8 日閲覧。
  - 14) 『芝居とキネマ 3 (10)』1926, 大阪毎日新聞社. 国立国会図書館デジタルコレクション, 平成 28 年 9 月 8 日閲覧。
  - 15) 『劇と映画 4 (10)』1926, 国際情報社. 国立国会図書館デジタルコレクション, 平成 28 年 9 月 8 日閲覧。
  - 16) 少女新報社, 『少女号』, 1927
  - 17) 菊池寛編『小学生全集: 76 児童劇集』1928, 興文社, pp-213, 「シンデレラ」, 国立国会図書館デジタルコレクション, 平成 28 年 9 月 8 日閲覧。
  - 18) 岸田辰弥作詞, 高木和夫作曲『宝塚歌劇: シンデレラの唄』, コロムビア, 1929.
  - 19) 深水正策『小さい花束』新泉社, 1938, pp94-99.
  - 20) 川上澄生『しんでれら出世繪嘶』, 川上澄生, 1943.
  - 21) シャルル・ペロー原作, 楠山正雄著, 東郷青児絵『少年文庫: シンデレラ姫』, 光文社, 1947.
  - 22) 堀寿子『乙女の願い』文海堂, 1948.
  - 23) 神崎清『ダリアの少女』湘南書房.
  - 24) 平成 28 年 9 月 8 日, 国立国会図書館検索システムにより著者調べ.
  - 25) 朝日新聞デジタルアーカイブ, <http://www.asahi.com/special/train/tokyostation100/24.html>, 平成 28 年 9 月 9 日閲覧。
  - 26) 『貝谷八百子バレエ団: シンデレラ姫, 歌舞伎座 公演プログラム』1951, 読売新聞社.
  - 27) 貝谷バレエ<sup>®</sup> アカデミー HP『貝谷八百子バレエ団の歴史』<http://kaitaniballet.com/custom6.html>, 平成 28 年 9 月 16 日閲覧。
  - 28) 『国際写真情報』国際写真情報社, 1952, 2 月.
  - 29) 村岡花子著『世界の絵本大型版: 19 ウォルト・ディズニーのシンデレラ姫』新潮社, 1953.
  - 30) 『Cinderella』教学研究社, 不明 (1959 年国立国会図書館納本).
  - 31) 発行年に関して出版元の松竹事業部の明記はないが, 出稿広告 (キスミーブルー) の発売年が 1953 年とパンフレット上に明記されているため, 1953 年の発行であると推測できる。また,
  - 32) 『東劇 色彩長編絵物語 シンデレラ姫』松竹事業部, 年代不明 (1953 年頃).
  - 33) 映画パンフレット『色彩長編絵物語 シンデレラ姫』年代不明 (1953 年頃)
  - 34) 映画パンフレット『ウォルト・ディズニーのシンデレラ姫』国際出版社, 1953.
  - 35) 1950 年代当時の映画パンフレット制作は著作権等が曖昧なことも考えらるため, 数種類のものが出版されていた可能性も考えられるが, 2016 年時点で入手できるものを尊重し, 検証した。
  - 36) 国立国会図書館には 133 件の所蔵が確認された。
  - 37) 映画パンフレット『ウォルト・ディズニーのシンデレラ姫』国際出版社, 1953, pp

10.

- 38) 新世界出版社発行のものは、内容に関しても『主演者について』とあるが記載されている内容は原作のシャルル・ペローに関する記述であったり、編集作業によって紙面を構成していたと考えられる誤植が多く見られる。
- 39) 日本視聴覚協会『視聴覚教育』7 (3) (61), 1953.
- 40) 『映画ストーリー』雄鶏社, 1953 (02).
- 42) Kussy'sMovieland『日本公開外国映画 映画チラシデータベース』  
[http://www.kussy.sakura.ne.jp/DBN/search.php?jouken=0&keyword=%A5%B7%A5F3%A5C7%A5EC%A5E9%C9%B1&mode=131&serchD=%B8%A1%BA%F7&serch\\_sub=%B8%A1%BA%F7&](http://www.kussy.sakura.ne.jp/DBN/search.php?jouken=0&keyword=%A5%B7%A5F3%A5C7%A5EC%A5E9%C9%B1&mode=131&serchD=%B8%A1%BA%F7&serch_sub=%B8%A1%BA%F7&) 平成 28 年 9 月 11 日閲覧。
- 43) ファッションビジネス学会編『ファッションビジネス年表』  
<http://www.fbsociety.com/nenpyo/index.html> 平成 28 年 9 月 19 日閲覧。
- 44) 身体に沿った細長いスタイルこのこと。(同掲『ファッション辞典』文化出版局より)
- 45) ギャザーやフレアを多く入れ、生地を多く使った蹴回しの大きい量感のあるスカートのこと(同掲『ファッション辞典』文化出版局より)
- 46) 綿に樹脂加工し、柄をプリントした夏物生地のこと。(同掲『ファッション辞典』文化出版局より)
- 47) 野口芳子『ジェンダーの固定概念を覆す：ジェンダー学的観点からのグリム童話解釈』、武庫川女子大学紀要(人文・社会科学)第58号。
- 48) 相違点及び比較店の1)から6)に関しては、ディズニー版『シンデレラ姫』をディズニー版、グリム版『シンデレラ』をグリム版と略し表記する。
- 49) 尾上典子『Walt Disney とアメリカ大衆文化：芸術と企業の理想的融合』亜細亜大学経営学紀要9(2), 2002.
- 50) 土井茂桂子『若年結婚層への結婚意識喚起を図る調査と提案：プリンセス像から掴む若者の華燭の宴像』神戸山手短期大学紀要第52号, 2009.
- 51) コレット・ダウリング『シンデレラ・コンプレックス』三笠書房, 1984.  
 その他の文献  
 黒薨社『キネマ旬報第830号』, 1951年5月, 平成28年9月9日閲覧。
- 52) 若桑みどり『お姫様とジェンダー：アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』ちくま書房, 2003.



## The Influence of the Disney's animation in Japan

~The influence of the fashion fad and the Japanese young women when the movie *Cinderella* was released in 1952.~

by

Satomi Era

Walt Disney's animated movie *Cinderella* was released in the United States on February 15, 1950. After that, it was released in Japan on March 7 1952. This thesis analyzes the fashion fad of the United States and Japan when the movie *Cinderella* was released. Then it consider if the movie had a influence in Japanese young ladys.

In Japan, 1940-1950 era had a fashion fad from the movie called "Cine Mode". At first, the movie *Cinderella* was also accepted as a fashionable musical work for young people.

The story of Cinderella was very popular in Japan in 1950, and the Japanese girls had longed for Cinderella story for a long time before the Disney's movie was released. Japanese girls accepted the Disney's Cinderella like a movie star, and now, many Japanese young girls believe the Cinderella's story as the happiest image of wedding style for brides. That is one of the phenomenon of the glocal culture in Japan.

We consider the princess who appear in Disney's animated movies as the fashion leaders in Japan, because Disney's Cinderella was the first girl that was admired as a fashion leader and the happiest bride at that time.